

教育心理学教室教官の研究状況報告

研究経過報告 —— '87年秋～'88年夏 ——

小 嶋 秀 夫

この1年の内になんらかの成果の出た新しい活動から報告して行く。まず、Trends in educational psychology in Japanというレビュー論文を教育心理学年報（日本教育心理学会，1988，27，116-141.）のために書いた。これは，速水敏彦氏と3名の大学院学生・研究生（青井教子・吉崎一人・平石賢二）との共著論文であるが，学会としては新しいスタイルのレビューとなってから3年目のものである。日本の研究がさらによく外国に知られることと，それがきっかけとなって外国の研究者との間に相互作用が起こってわが国の研究への刺激となることを願って執筆したものである。そのような機能を少しでも果たせたかは，このような試みが継続されて，少し時間をかけて評価する必要がある。上記のレビュー論文の執筆は，共著者の多大な協力があってできた仕事であるが，筆者の負担も重く，このようなことを再びやろうという気にはなれない。私たちよりさらに適任の執筆者によって，このような試みが，今後も発展して行くことを願っている。

ナーチュランス（養護性）の発達に関しては，科学研究費補助金（昭和62年度）により，河合優年氏と共同で2つの研究を行った。1つは，幼稚園・保育所の年中組・小学校2・5年生の親に，子どものナーチュランス行動と興味を中心とした現状に関する報告を求めたものである。これはもともとMelson（Purdue University）・Fogel（University of Utah）両氏と共同企画した，日米比較研究の日本側のデータである。用いた方法は単純なものであるが，得られた結果を基にして，筆者は乳幼児期から成人期に至るまでのナーチュランスの発達の機構の一部について，かなり自由なスペキュレーションを報告書で展開した。それを，ナーチュランスの発達についての自分たちの今後の研究の足がかりとした。この研究は，「社会的相互作用と人間の発達」という大きなテーマの一部を構成すると，自分の中では位置づけている。この部分の研究は，日本教育心理学会第30回総会（1988年11月，鳴門市）で発表することになって

いる。ナーチュランス研究のもう1つは，きょうだい関係の中でのナーチュランスを，小規模なきょうだい研究の縦断サンプルの協力を得て調べたものである。

【児童発達観，子育て，家族生活と子どもの発達に関する歴史的研究】 心理学評論に現れることになる小論，「わが国における母子関係の歴史的考察」は，母子関係の歴史の変遷自体を記述したものではない。そこではまず，発達研究者が子どもの発達の歴史について論じる場合に，歴史家の研究に依存するだけに止まらないで，親子関係や子どもの発達に関する専門的知識を活用しつつ，手に合う歴史資料を直接に分析することによって，家族と子どもの歴史の学際的研究に何らかの寄与をすることが可能だという見解を打ち出した。そして，筆者の個人的経験を踏まえて，研究方法上の問題を検討し，さらに，研究資料としての日記の有用性を論じている。

日本医史学雑誌に現れることになる論文，「明治初期の翻訳育児書」は，昨年この欄で述べた発表をもとにまとめたものである。学会での発表の抄録を書いた時点と，本論文を執筆した時点との間の1年数か月うちに，いくつか分かったことがある。しかし，未だに不明のことや，分析が不十分な点も多くあることは認めなければならない。大学で切れ切れになった時間から，30分，60分という時間をかき集め，また，東京を中心に出張した用件の合間の60分，90分という時間を長期間かけてつなぎ合わせてした仕事である。進歩はきわめて遅いし問題も多く抱えているが，とりあえず現段階のものとしてまとめたのである。

【家族関係】 FRI（Family Relationships Inventory）という家族関係インヴェントリーを1982年以来開発してきたが，それは研究目的というよりは実用目的のものである。試験的な使用期間のフェーズ1と2を経て，漸く限られた範囲ではあるが，希望により使用してもらえらるフェーズ3に入ったこの段階で，暫定的な手引きを作成した（小嶋・内山・宮川，1988）。その原動力となり，長期間，辛抱強く見守ってご指導いただいた鈴

木榮名誉教授（小児医学）に感謝したい。

前の項で少し触れたきょうだい関係の研究については、その一部のデータを、森下正康（和歌山大学）・河合優年氏とともに、日本教育心理学会第30回総会で発表することになっている。

【その他】 岩波講座・教育の方法2（1987）に、「文化」という小論が載っている。それは、日本の子どもの認知テストの成績の特徴を中心的素材として扱いつつ、学習と問題解決への動機づけの社会的・文化的背景

と、教授と学習の過程に関するethnopsychology（土着の心理学）の一面を構成しようとする試論であった。

また、久世敏雄（編）教育心理学（名古屋大学出版会、1988）の中に「発達と教育」という章が、村上英治（編）の教育心理学への歩み（川島書店、1988）の中に「家族関係と人間発達の領域の中で」という章が現れている。

（1988年8月19日）

研究経過報告（昭和62年8月～63年7月）

原 岡 一 馬

この1年間に行った研究活動の概要を述べることにする。

I. 著書・翻訳・事典関係

著書の執筆については、長島貞夫編『子どもがみえる先生』、金子書房、1988、の中で、「自信を育てる学級—リーダーとしての教師の役割を中心に—」、pp193-204、を分担執筆した。次に、久世敏雄編『教育の心理』、名古屋大学出版会、1988、の中で、「教育心理学と社会」pp33-44、を分担執筆し、さらに、村上英治編『教育心理学への歩み』、川島書店、1988の中で「態度変容研究の歩み」、pp239-257、を執筆した。

翻訳については、Henry Clay Lindgren、『Great Expectations - The psychology of money』William Kaufmann, Inc., 1980. を有斐閣より『お金の心理学』として翻訳出版した。

事典執筆については、東洋ら編『現代教育評価事典』、金子書房、1988、の中で、「社会性の評価」「社会的態度」の2つの事項について執筆した。

II. 教育・心理関係研究論文および雑誌論文

研究論文については、「教師期待の認知と成績の帰属および動機づけ」名古屋大学教育学部紀要—教育心理学—、1987、Vol.34、1-13. を発表した。

雑誌論文としては、

- (1) 小集団コミュニケーションにおける情報獲得と処理、「特別活動研究」、明治図書、1987、10、No. 240、118-123.
- (2) 小集団における問題解決（一）、「特別活動研究」、明治図書、1987、11、No. 241、118-123.

- (3) 小集団における問題解決（二）、「特別活動研究」、明治図書、1987、12、No. 242、118-123.
 - (4) 小集団討議における傾聴行動、「特別活動研究」、明治図書、1988、1、No. 243、118-123.
 - (5) 小集団討議とフィードバック、「特別活動研究」、明治図書、1988、2、No. 244、118-123.
 - (6) 小集団におけるリーダーシップ、「特別活動研究」、明治図書、1988、3、No. 245、118-123.
- がある。

III. その他

また、学会発表関係では、「青少年育成の問題と実態」を日本教育心理学会第29回総会に発表、「青少年育成の問題と実態 II」を日本社会心理学会第28回大会発表、さらに、日本心理学会第51回大会ワークショップ「説得的コミュニケーションによる態度変化と抵抗」の代表責任者をつとめ、日本教育心理学会第29回総会自主シンポジウムの「教師の学習指導としての力量を考える」において指定討論者をつとめた。

また、特定研究の一貫として、1988年1月に、「教師の成長を考える」というシンポジウムを開いた。現在、その結果をもとに、これに関する研究を進展させる研究に取り組んでいる。

この他、現在、青少年教育実践効果のための現場研究として、中都市、農山村の中で特定地区を選定し、教育効果を吟味するための過程観察を行っているところである。

（1988年8月30日）